半世紀ぶりの同級会

61期7組　恩師の変貌ぶりに驚き

昨年11月21日、上山田温泉で約半世紀ぶりの同級会が開催された。恩師の折井幸雄先生を含め参加者は総勢18人。村田宣雄先生は米寿を過ぎてご健在だが、酒席での体力を危惧されて辞退。寺島義昭君の司会のもと、彼岸に旅立った6人の友に黙祷をささげることから会はスタートした。

乾杯の音頭は傘寿を過ぎ（83歳）意気軒昂そのものの折井先生のご発声で約半世紀ぶりの再会を祝した。

しばし歓談後、順繰りに各自の近況報告に移り、「手短に」とのことが、興に乗り過ぎ延々とやまない者が続出し、ついには司会者からストップがかかる。

メンバーのうち地元の方々とはまさに卒業以来という人もあり、半世紀の風雪に耐えてきた風貌に、誰だったか分からぬ人が森川満彦、田部井孝行の両君であった。

一番のサプライズは折井先生の変貌ぶり。5年間かけて口説き落とした最愛の奥様とのなれ初め、38歳でのゴールイン、お子さまのこと、上田高校での定時制を含めた勤務、飯山北高校、上田千曲高校などでの教員生活、リタイア後のしなの美術館での番外勤務など、お話が尽きない。

私の印象ではシャイな新米教師の折井さんは「生徒の顔もまともに見られず、ただ赤くなってうつむいて、朴訥なしゃべりをする先生」であったのに。

折井先生の高校1年の社会科の授業で最も印象に残っているのは、ガリ版刷りで映画の題名を列挙したものを配布し、コメントされたお姿である。

宴たけなわとなり皆で校歌、凱歌、応援歌、寮歌などをラジカセの音をバックに声を張り上げて歌う。

上山田ホテルにて

午後6時に始まった宴会は校歌斉唱が大トリ、滝澤進君の一本締めで幕引きとなった。2次会は部屋に戻り、日本酒、ワイン、焼酎、ビールなどで2度目の乾杯となる。夜が更けるまでディベートが続き（信州人の特性か）、果ては政治・経済に及んだ。

翌朝9時過ぎ、「健康に過ごし、次回の集いにはより多くの友の参加を得て開催しよう」と再会を約し散会となった。

大澤義隆（61期）

東海道53次の旅（2）

土山宿から桑名宿まで

昨年11月16日、水口石橋駅から土山宿（甲賀市）に向かう。今郷一里塚、市場一里塚を過ぎ、茶畑の中の街道を歩くと土山宿。この宿場で一軒になってしまった旅館「大安」で宿泊。

しっかり朝食を食べて、鈴鹿峠に向かう。旧道を国道が寸断している街道を歩き、国道がトンネルに入る手前で峠道に入る。峠の上には大きな万人講常夜燈が立てられ、あたりは一面の茶畑。

桑名宿の七里の渡し跡

森の中の急な坂道を滑らないように下る。鈴鹿頓宮の跡にある神社を過ぎ、さらに下ると坂下宿。ここは難所の鈴鹿峠を控え、にぎわったというが、かつての面影は全くない。関宿までは緩やかな下り道。関宿は東海道一の宿場、次回見学することにして駅に向かった。

今年3月1日、関宿を見学。街道沿いの家々に雛飾りが並び「東海道のおひなさま」展が行われていた。地蔵院、大旅籠・歴史資料館など見どころが多く観光客もいっぱい。

亀山宿は、宿場内がカラー舗装されていて、折れ曲がった城下の道だが、分かりやすい。家老屋敷などを見学してホテルに着いた。

翌朝、野面積みの石垣の上に建つ亀山城多門櫓などを見学してから庄野宿に向かう。和田一里塚に「くたびれたやつが見つける一里塚」という江戸川柳が紹介してあり、昔も今も同じだと思った。庄野宿資料館で懇切丁寧な説明を聞き、見学して帰路に着く。

4月19日、加佐登駅から石薬師宿へ。石薬師は佐々木信綱の出身地。街道沿いに歌碑が立てられ「信綱かるた道」とある。石薬師宿は丘の上にあり、ここから四日市に向かって下り道。芭蕉が落馬したという杖衝坂は急な坂道。日永の追分のわき水でのどを潤し、ひたすら歩いて四日市のホテルに落ち着く。

翌朝、海抜標示がどんどん下がる標識を見ながら、歩きに歩いて桑名宿の七里の渡し跡に着いた。伊勢神宮一の鳥居の先には揖斐川、長良川、木曽川が流れ、なるほど船でなくては渡れなかった、と実感した。右手には、戊辰戦争で破壊された桑名城の石垣と復元された櫓がぽつんと建っていた。

清水計枝（64期）